

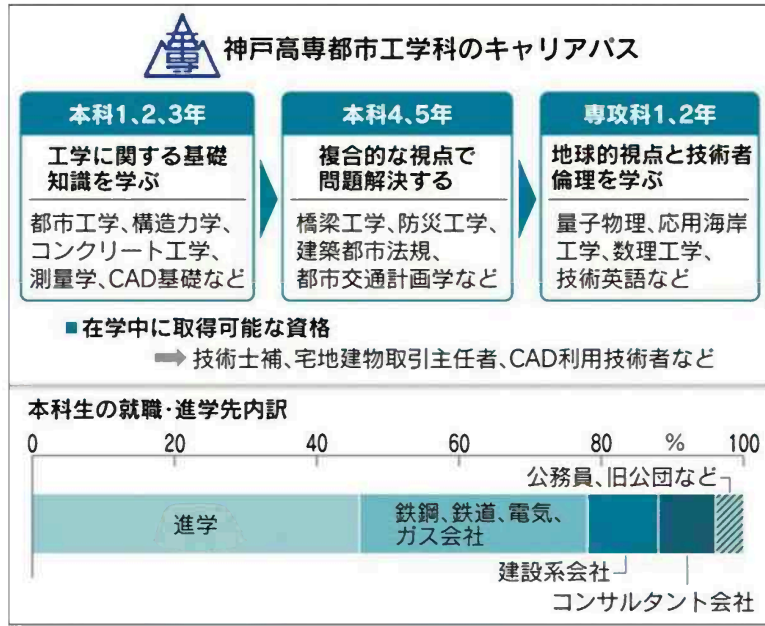
防災の街 実現へ駆ける

教訓残る「神戸」 地域密着で学ぶ

高専に任せる! 2018

第2部 陸海空の精鋭 ③

「早く被災地に行きたいのですが」。7月上旬の西日本豪雨災害の被災地復興のためにボランティアとして参加しようとする高専生がいる。神戸市立工業高等専門学校、都市工科大学5年の豊嶋康祐さん。前期試験や大学編入試験があるため、まだ現地に行けないが、「8月中下旬には必ず行きます。まだ全然、人が足りていないですから」。中学生の時にテレビで見た東日本大震災の衝撃を受け、「居てもたっても居られなくなった」と



夏休み返上 競技大会準備 構造・デザインの腕競う

「自然災害が相次いでいて都市工学科への関心は高まっている」（学部長の水越睦視教授）として最近では防災リテラシー育成に力を入れる。阪神大震災から早期に復興した経験をより社会にいかすねらいがあるからだ。

防災や減災に関する講義では、地殻変動や気象変動などの自然の営みと災害発生メカニズムに

快速で美しい都市空間をデザインすることを目的に創設された。もともとあった土木工学科を1994年に変更して誕生した学専であり、全国の高専でもユニークな存在だ。翌年に阪神大震災が起き、その学問の必要性が高まるという運命を背負う。西日本豪雨では神戸市内でも土砂崩れが起きた場所があった。

「自然災害が相次いでいて都市工学科への関心は高まっている」（学部長の水越睦視教授）として最近では防災リテラシー育成に力を入れる。阪神大震災から早期に復興した経験をより社会にいかすねらいがあるからだ。

6月の大阪北部地震で危険な場所の有無や、どのような経路で避難所に向かうのが最善なのかを発表していた。

6月の大阪北部地震で危険な場所の有無や、どのような経路で避難所に向かうのが最善なのかを発表していた。



11月の全国高等専門学校デザインコンペティションに向けて橋を製作する「デザコン研究会」のメンバー

小学校のブロック塀が崩れ、不幸にも幼い命が奪われた直後だけに発表する姿は真剣そのもの。住宅に潜む見落としがちな場所などが次々と指摘され、山、丘、谷、海など起伏のある神戸は様々な社会インフラを直接目で見ることもできる「教材」の宝庫だ。阪神大震災を学び、語り継ぐ施設も多い。そして豊かな自然があるのも神戸の特長だ。都市の坂道は負担になるので、意図してない貯水池も大雨だと何が起きるかわからない。神戸市西部で明石市と隣接している場所の報告では明石市側の地域情報が乏しくなることもわかった。災害は行政区分に関係なく起こる。都市を災害から守るための気づきだ。

教える側も土木系を中心に地方自治体のアドバイザーとして地方のインフラに目を光らす。高度成長期には道路、橋梁などの社会インフラが急速に整備された。だが成熟した社会を迎え、財源確保に奔走する中で、新たな社会インフラの充実がなかに部門に挑む。昨年は同部

8月になり全国の高専は夏休みに入り、キャンパスは静かになると思いきや休みを返上し、実習室で手を動かしている学生がいる。秋から冬にかけて開催される高専生向けの様々な競技大会の準備が本格化するからだ。都市工学科の同好会「デザコン研究会」は11月の全国高等専門学校デザインコンペティション（デザコン）の構造デザイン部門に挑む。昨年は同部